

いもう 葦毛通信



サギソウ

平成 28 年 8 月 25 日
豊橋市文化財センター
豊橋市松葉町 3 丁目 1
TEL : 0532-56-6060

No. 41

1、2016 モニタリング報告-5

A-1 地点(北から)

A-1 地点は、平成 24 年度に作業を行いました。かつて、ヒメミミカキグサが自生していた地点で、作業前年には発芽が確認できなくなっていたところでした。作業はヒメミミカキグサの復活を目指して、島状部の除去、溜まった土の除去等を行いました。作業後ヒメミミカキグサは復活し、現在も毎年 20 株程度が開花しています。

作業前には南側（写真手前側）がイヌツゲ、ネザサ等が繁茂する島状部で土が溜まりやや高くなっていました。北側（次頁作業前）は土が溜まりヌマガヤ群落になっていました。ヌマガヤ群落の前にはわずかに小さな水溜りがありましたが、ここにはかつて小さな池があったそうです。植生回復作業では、木を伐り、除草して、ヌマガヤ群落の根の層を除去して池（下写真作業後の中央の黒い部分）を復元しました。

1 年目では、まだ中央に黒くなった池が見えますが、3 年目には池が埋まりつつあり、植物も多くなってよくわからなくなっています。平成 25 年度には画面奥の島状部（下写真 1 年目、I-1 地点下流部、葦毛通信 No. 40 参照）を木道沿いに帯状に除去し水の流れを復元し（下写真 3 年目）、南側の遠く B 地点まで見渡せるようになりました。



2012 年 11 月 2 日（作業前）



2013 年 3 月 26 日（作業後）



2013 年 4 月 14 日（1 年目）



2015 年 4 月 6 日（3 年目）

A-1地点(南から)

作業前はヌマガヤ群落との境にわずかに水溜まりがある状態でした。1年目は広く浅く冠水し、浅い池状（下写真1年目）になりました。この池状になったところは、裸地に薄く土が溜まった状態で、この部分からミミカキグサ類が大量に出現しました。ミミカキグサが最も多く、ムラサキミミカキグサ、ホザキノミミカキグサも見られます。ヒメミミカキグサは、土があまり溜まっておらず、わずかに冠水した裸地に近い環境のところに復活しました。この場所では、日本産ミミカキグサ4種すべてを見ることができます。

2年目から4年目にかけては、徐々に土が溜まり、冠水する範囲が狭くなり、水深も浅くなりました。裸地化して水が少ない所ではイヌノハナヒゲが優勢になる場合が多いようですが、水量があり、冠水している部分が多いこの場所では変化のスピードが遅いようです。このまま水深が浅くなり、乾燥化するとミミカキグサ類が少なくなっていくと予想しています。



2012年11月2日（作業前）



2013年7月16日（1年目）



2013年7月16日（ミミカキグサ開花状況）



2014年7月22日（2年目）



2015年7月21日（3年目）



2016年8月24日（4年目）

K-4地点

K-4地点は踏圧による影響を観察し、退行遷移が起きるのかを確認しているところです。踏圧（攪乱）を加えた状況は葦毛通信 No. 37 で報告しています。

下の写真は木道に接した入口部分で、石を置いた部分が大小の穴状になり、強く攪乱したところです。石を置いたところは、最初は周辺と比較すると植物の発芽が少ない状況ですが、8月4日には周りとはほとんど変わらない状態になり、石の跡も見えなくなりました。



2016年4月11日



2016年5月27日



2016年7月6日



2016年8月4日



左：イヌノハナヒゲ群落、右：ミカワシンジュガヤ群落（8月4日）ミカワシンジュガヤ

入口から先の南側は明らかな違いが見られました。写真（前頁写真）右側はミカワシンジュガヤ群落になり、左側はイヌノハナヒゲ群落になりました。右側はヌマガヤ群落だったところで、通路として使用して踏圧をかけたところです。踏むことによってヌマガヤの勢いが抑えられ、ミカワシンジュガヤ（県絶滅危惧Ⅱ類）が出現したものと考えられます。踏むことによって退行遷移が起きて、ミカワシンジュガヤが埋土種子から復活したものと考えられます。奥のやや乾燥した島状部の縁辺ではコシンジュガヤが出現しました。

ミカワシンジュガヤはヌマガヤ群落の表土を一部除去した別の実験地でも出現しており、埋土種子が残っていれば、攪乱の初期に出現し、すぐに衰退してしまうようです。

右の写真は反対側の南側から北を見たところです。写真中央が通路として踏圧をかけたところです。7月6日には画面手前に礫が多く見えていますが、礫の間には土が溜まっています。手前にはコシンジュガヤ、奥にはイヌノハナヒゲが見えます。8月16日には画面中央でイヌノハナヒゲが優勢になり、大きな群落になりました。地表の礫も見えにくくなっています。他の実験地と同様に裸地に近いやや乾燥気味の湿地で、イヌノハナヒゲが優勢になっている状態も同じです。少なくとも踏圧がかかることにより、湿地としてダメになったということは無いようです。

イヌノハナヒゲの手前側は石が目立つ裸地になっていますが、ここから山側には同じような環境が続き、点々とコシンジュガヤが発芽しています。コシンジュガヤ、ケシンジュガヤ、ミカワシンジュガヤ等のシンジュガヤ類は、遷移の初期段階で礫が目立つ裸地に最初に出現し、数年で衰退するようです。

踏圧による影響は、今のところ、植生保護に関して明らかにマイナスと考えられる点は見られません。踏むことによって強い植物が衰退し、周りとは異なった環境が生み出され、そこに適応した植物が出現し、生物多様性に貢献する結果になっているようです。



2016年7月6日



2016年8月16日



裸地のコシンジュガヤ